

エゾマツ



No 72 2005・3・23 春季号

北海道ボランティア・レンジャー協議会

目 次

巻頭言	春の思い出話	—— 会長 川端功治	2	
I	自然の観察、その関わり、各地からの報告	—— 特集	4	
	・とっておきの探鳥地、地球岬	—— 岡村敏夫	・函館山で思うこと	
	—— 橘宜由	・自然への思い	—— 中林光司	・自然観察会と環境問題
	—— 谷口勇五郎。	・変わりもの	—— 今村衛	・帯広野草園観察会に参加して
	—— 加藤幸夫	・独り言	—— 森本夏彦。	・鶴川でコミミズクに出会ったのだ
	—— 田村允郁	・冬の森の観察会	—— 伊藤秀平	
II	道外の自然観察、紀行		19	
	・大山の木道に感謝する	—— 小泉郁夫		
	・氷河地形が出現した八甲田山	—— 成田伸一		
II	自著などの紹介		24	
	・地域の植物を本にまとめる	—— 小野寺実		
	・鶴川河口及び周辺で観察された野鳥	—— 門村徳男		
	・本の紹介	—— 南部栄一		
III	特別寄稿		28	
	・野幌雑感	—— 野幌森林公園事所 永安芳江		
IV	連載		29	
	・エナガ	—— 荻野裕子		
	・50嵐の恣意的ブックレビュー その(3)	—— 五十嵐一夫		
V	事務局からのお知らせ		33	
	・編集後記			

春の思い出話

会長 川端 功 治

「世の中に 絶えて桜の なかりせば 春の心はのどけ からまし」

（古今集在原業平の歌）咲いた散ったと気をもませる桜がなければ春の人の心はどんなにか、のどかであろうにとボヤいた函館在勤時代の頃を思い出して居ります。五稜郭、松前、森、の三大桜の名所の案内は慣れっこになって記憶も朧ろになって仕舞いましたが、忘れることの出来ない印象を残して去ったお客さんを時折り思い出しております。

それはドイツ人夫妻で通訳の説明によるとドイツ国の森林官だが、営林署長は定年が78歳で、この度功労賞として世界一周の旅の途上にあると云う。しかも日本に上陸して何処にも寄らず真っ直ぐ函館に来たのは帰国しての報告文の題名は（笹を駆除すれば、北海道民の貧困は救われる）とのことでした。

北海道は開拓開発の途上にあり、農林工商いずれも活発で、日本のホープとして期待されているのに、なにお根拠に貧困とキメつけるのかと反論したところあつさり、古文書の資料に依ったもので、なにわともあれ問題の笹を見学したいのでよろしくとのことで論議は後回し。

外国人はバンブー即ち竹には詳しいが笹は珍しく見学の注文が多い。駒が岳付近の笹生地に案内したところ、その広大さに驚き、何故に刈り払い牧場にしないのか、農地にならないのか、の質問が集中したが、投資と採算のバランス次第で検討されているものと思いますと答えるに止めた。

岩内で笹加工の工場が建設されたが採集集荷が割高で採算がとれず解散したことや、笹枯殺剤の散布で農地造成も試みたが、薬剤成分の残留で安全衛生に問題があり実験も中止されたようであることも伝えておいた。

帰途話題にとガルトネルブナ林に立ち寄ったが言下にこの木はヨーロッパの

母なるブナの木とは違うと言うなり口をつぐんでしまった。

「注釈—榎本武揚と土方才三は北海道国を建立する計画であつた。道南の笹生地を機械化された洋式農業で、牧畜業も兼ねた豊かな農民づくりをドイツ国領事であつたガルトネル氏の進言に共鳴した榎本と土方は七飯町付近の土地を同氏に売却してその成果を期待した。その心意気に感動した同領事は辞職して買い受けた土地の開発に専念することになった。ドイツ人は幼い頃からブナの樹に親しみ、かくれんぼや鬼ごっこ、長じては語らいの木陰など母なる樹として愛され尊敬もされている。1万本の山取ブナ苗木を望郷樹として植えたが、現存するのは極めてすくないが樹形が電柱状で母なる姿ではない。ところが時代は大逆転土方が戦死、榎本は降伏して新政府の要人となったことである。函館近郊にドイツ領土が出来るのを恐れ新政府は強引に売った土地の買戻しを強行ガルトネルは悄然として追われるように函館を去った。」

来客のドイツ営林署長はガルトネルの帰国報告文を熟読して来日したのではないか。その為初対面の私に、いきなり北海道人は笹に囲まれて貧乏暮らしに明け暮れているのを、ガルトネル氏が洋式農業の導入によって解決しようとしたところ、明治政府の無理解から一切が無に帰した。この二の舞を踏まない案を意中に秘めて来日したドイツの署長は、私の説明を聞いて態度が急変してしまい笹退治の事を口にしなくなった。

お別れの時にの署長が口にしたのは定年はドイツでは78歳、日本では55歳なのは不公平だ。命終が平均85歳とすれば楽しむ余命がドイツは7年、日本は30年、これは不公平も甚だしい。帰国したら早速定年70歳運動を展開したい。(ドイツの年金は現職給の80%保証、政府回答は常に年金用貯蓄不足)。

如何ですか。会員各位には長いキャリアがあって、面白いお話や、楽しい物語り、為になる体験話が沢山おありと思いますので、是非ご披露の投稿をお願いしたいと思います。本紙に記録としてとどめることも資料として大切なことです。よろしくお含み置き下さるようお願いいたします。

とっておきの探鳥地、地球岬

室蘭市 岡村 敏夫

北海道に越して来て以来、その楽しさにすっかり魅せられてしまった探鳥歴も10年目を迎える。転勤の度に、渡り鳥のように（渡るというより漂うの方か?）、各地を渡り歩いている。北海道に来てからだけでも函館、札幌、根室そして現在の室蘭で4か所目であるが、行く先々で探鳥の楽しみは尽きない。いつも引越し荷物の整理を待ちきれず、あらかじめ狙いを定めておいた探鳥地にまっしぐら・という愚行を引越しの度に繰り返している。一通りお目当ての探鳥地を巡り終えると、自然とお気に入りの「マイ・探鳥地」ができてくる。函館では函館山、札幌では野幌森林公園、根室では春国岱がそうであった。

さて室蘭でのマイ・探鳥地はどこか?となると少々迷ってしまう。探鳥地のガイドブックには必ず載っている測量山をはじめ地球岬、ポロト湖、伊達の長流川、登別の幌別川、少し足を延ばせば大沼公園、羊蹄山麓、



観察路のある樹林（写真左奥に谷が延びている）

苫小牧北大演習林等々、スケールは前住地の根室とは比べようもないが、鳥の種類の多さからは決してひけをとらない探鳥地がメジロ押しである。

これらの中からマイ・探鳥地を一つだけ選ぶとすれば、室蘭2年間の実績からみるとダントツで地球岬になる。地球岬といっても展望台や灯台がある観光スポットの方でなく、展望台の駐車場を起点・終点とする「地球岬森林浴コース」と名づけられた自然観察路の方である。

展望台や灯台付近の喧騒をよそに、このコースはいつ歩いてもすれ違う人もまばらで、波の音、風のざわめき、小鳥のさえずりをゆっくり楽しむことができる。観察路は噴火湾に注ぐ浅い谷を挟む両側の斜面（海

側は一部、尾根)につけられている起伏に富んだ約5kmの周回コースになっている(谷間を辿るオブションコースもある)。コースのほとんどがミズナラ、カシワ、ホオノキ等の高木、ツリバナ、タニウツギ、オオカメノキ等の中・低木の林間コースで、ところどころ展望が開けて噴火湾から視界が良ければ対岸の駒ヶ岳を望むことができる。

このコースで観察できる鳥はワシ・タカ類、カラ・ゲラ類はもちろんのこと、この2年間に限っても春秋の渡りの季節を中心にオオルリ、コルリ、コマドリ、ノゴマ、クロジ、マミジロ、トラツグミ、アカウソ、ジョウビタキ等、普段どちらかと言うと見る機会の多くない野鳥がいっぱい観察ができた。

野鳥だけでなく早春、花の季節には観察路の両脇にはキクザキイチゲ、カタクリ、エゾエンゴサク、コジマエンレイソウ、ニリンソウ、オオバキスマレ等々、ミニお花畑がいたるところに出現する。また、広葉樹がほとんどの樹林であるので、全山が赤や黄色に彩られる秋の紅葉の季節もまた素晴らしい。とっておきの探鳥地として紹介する所以である。

地球岬の自然観察路は四季を通じて楽しめるが、一番のお薦めは早春、カタクリのお花畑が出現する頃である、この頃にはちょうどコマドリやコルリ、ルリビタキ等の夏鳥も渡って来て、花と鳥を一緒に楽しむことができる。是非、一度、来訪を!



観察路より噴火湾を隔てて北海道駒ヶ岳を望む



すっかり冬枯れの観察路(噴火湾側の尾根コース)

函館山で思うこと

橋 宜 由

函館山は、函館を観光で訪れた人々が必ず行くところで、その頂上の展望台から眺める夜景は、街の灯りがキラキラ輝き、宝石を撒き散らしたさまににていて、年間を通うして大変人気があります。

また、地元の多くの人達から愛されている山でもあります。何故なのでしょう
か？

それは、この山の標高が 330 メートルと高くなく、お子さんから高齢者の方達がゆっくり登っても 1 時間前後で登れるからでしょうか。街に接して交通の便がよいからなのでしょう。それだけではないと思います。

この山は、第 2 次大戦が終わるまで、地政的に重要なところに位置し、日露戦争以来、要塞として長い間、民間人の立ち入りが禁止されていたので、自生している樹木、山野草の種類が多く、四季を通じて、我々の眼を楽しませてくれるうえ、頂上までの登山道は、色々のコースがあり、変化があるからなのだと思います。

例えば、ある場所では、サイハイランが群生していたり、一人静や、ハクサンチドリ
の山野草が咲いていたり、蝦夷山桜、ドウダンツツジやブナ、水楢、カエデ、松類の広葉針葉混交樹林で覆われていたり、違うコースでは、トリカブトがあたり一面にあり、開花期には紫の絨毯を敷き詰めたような美しい場所があつたり、西国三十三所と同じ札所の立て札と守護神があり、それを巡る楽しみなコースがあつたり、先ほど触れたように日露戦争当時の砲台跡、砲弾の貯蔵庫跡があり、歴史的にも興味がるものが残されていたりと多面的な顔を持ち合わせているのです。

そこが、地元の多くのひとを惹きつける所以だと思います。

この山をこよなく愛する人達が、登山口にふれあいセンターと名付けたボランティアの人達で運営している事務所があります。

事前にガイドを依頼しますとこの事務所の人が、頂上までの樹木、山野草、野鳥について解説しながら案内をしてくれます。

当然ながらこの山は函館の条例で草の一本も採ることが禁じられており、違反者は過料されます。(最高額 50 万円)

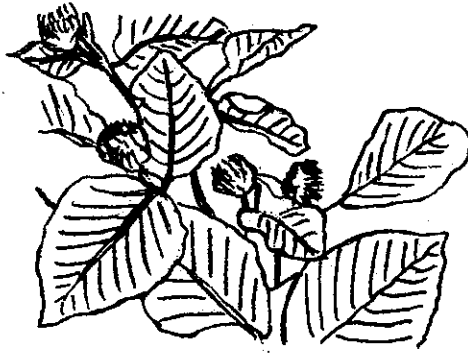
残念ながらこの山も登山者が増加することにより、一部の心無い人達が山野草を採取したり、草が踏み倒されて道になったり、タバコの吸殻、お菓子の包み紙、飲んだあとのペットボトルを捨てたりとマナー違反が後をたちません。

このような現状をなんとかしたいと思っ
ていても、見ず知らずの他人にたいし

て注意をすることは、勇気がいることですし、なかなかできないものです。ゴミ等は気がつけば拾って所定の場所に捨てたりすることはできます。このようなことは些細なことではありますが、しないよりはましな程度でしかありません。

それよりは、知った仲間、自然観察会等のときには、ベテランの方がリーダーとなって、案内をしたいと思いますので、参加者のなかには、経験がない人や山のルールを知らない人がいるので、説明し啓蒙をしていただくことが、大事なことだと思います。

昨年縁あってボランティア・レンジャーに入会させていただきネームプレート、腕章を頂戴したので、入会後はこの山に行くにしてもこの2は身につけて、自分自身の戒めにするとともに、心無い人達への抑止効果になれば幸いです。



ブナの果実

自然への思い

札幌市 中林光司

こんにちは。私は2004年8月のボランティア・レンジャー基礎セミナーに始めて参加した後、協議会に入会しました。その後、協議会主催の自然観察会にまだ出席したことが無く、会員の方とお会いしたのは12月、2月の野幌での実践セミナー（2月に参加された皆様方、娘が大変お世話になりありがとうございました）だけですので、文を書くのはちょっとためられるのですが……

さて、私は子どもの頃外で遊ぶことが好きだったので、家から近かったこともあり、よく円山・三角山・旭山公園・盤渓地区に出かけ、木と親しみ街を望みました。今は少なくなったので叱られるでしょうが、円山公園・北海道神宮ではセミやクワガタを、そして今では高級住宅街と呼ばれている大倉山ジャンプ競技場や三角山のふもとの住宅造成前の原っぱまで下の自宅から歩いて行き、よくコオロギ、キリギリスやサンショウオを取って過ごしました。現在それらの風景がほとんど失われてしまい、円山と北海道神宮くらいしかあまり変わらない風景として残っていませんが、目を閉じるとそのころの原っぱの光景が今も浮かびます。これらは人の手が入った「みどり」だったのですが、子どもにとっては遊びやすく親しみやすい、私にとっていわゆる原風景です。

今、当時とほぼ同じ場所に住み子どももいますが、小さい子どもにとって楽しい、こんな場所をつくり残して行けたらいいなと思っています。また、大人になってからは、身近な「みどり」だけでなく庭園・公園も利用していますが、娘が生まれる前に妻や友達と雨龍沼、礼文島、利尻岳、大雪山などを訪れ自然の中に咲き乱れる花々を見て感動したのを忘れません。

私の自然への思いはいろいろな世代間で、また世界の方々（韓国語会話を学んでいるので、特にアジアの方々の訪問に興味があります）と一緒に素晴らしい北海道の自然を通して交流する機会をつくることです。家（プライベートの世界）から出て、街（身近な公園・広場／パブリックの世界）へ、そして大自然（ネーチャーの世界）へ、を体験できるような道筋が大切だと思っています。それには、小さい子どものうちから屋内から屋外に興味をもてるよ

うな、身近な緑や公園・広場づくりが必要でしょうし、成人で日常生活や外出が困難になった方には、屋内環境を整え思考を外向きへとし、リハビリや外出の意欲を持てることが大事でしょう。そののち、皆様のように自然と親しんでいる方々とサポートしながら、木々の爽やかさ、野鳥や生物の神秘、野花の美しさがいっぱいの北海道の素晴らしい大自然を体験しながらいろいろな世代の方々や世界の方々と屈託無く交流できれば、とても素晴らしいことだとおもいます。実際韓国からの知人を娘と一緒に公園や林、雪原に案内してとても喜ばれたので、努力すれば北海道の自然による国際交流については可能だと信じています。

最近仕事や、子育てに追われて自然と親しむことが少なくなっていましたので、自然に関する知識も希薄になっておりましたところ、セミナーと一緒に研修を受けた際、参加者のみなさんの知識が深いのを知り驚きました。わたしも娘が小学生になり一緒に自然活動できるようになりましたので、いろいろな機会に楽しい事を教えていただきたいと思ひますし、観察会などの企画がございましたら是非お声をかけていただきたいと思ひております。

今、家族やみなさんと一緒に素晴らしい自然を楽しめることの幸せを感じています。

今後ともよろしくお願ひします。

原稿のお願ひ

- 1、次号夏季号は6月下旬の発行の予定。原稿の締切りは6月15日までに広報部まで。
- 2、原稿はB5でお願ひ（機関誌の大きさ）。次回は大会の資料を載せる予定なのでスペースに制限あり、B5で1枚（長くとも2枚）で。長くなるときには連載としていきますので、
(1) として (2) などは次号とします。

私は定年後、生き甲斐のためやボケ防止のため、軽スポーツをする一方、自然の散策が好きなので自然観察をしようと思い、ボラレンを始め、色々な団体の講習会に参加しました。市内や近隣の自然観察会に、始めのうちは一般参加者として、それから解説員として案内をするようになりました。樹木・草本・野鳥・きのこ・昆虫などと、色々な機会に勉強させてもらい、一応、動植物について案内できるようになりました。解説員同士や参加者の人達とのふれあいや特に喜びを感じるのは参加者の「なるほど」と納得した時の笑顔です。現在5年目を終わろうとしています。しかし、最近、そうした動植物の生態系での役割を学んだり、解説する立場になって、一人の人間として大切なことは、地球環境に配慮することだと思えるようになってきたことです。自然観察会でもそれを意識しながらいくらか案内できるようになりました。

地球の温暖化について、色々学ぶことはあっても、まるで他人事のように思っていました。CO₂・メタンなど「温室効果ガス」が徐々に増加し、地球の温度が上昇し、海水面の上昇、生物種の絶滅や食料不足が起きるといふのです。自然の自浄能力を上回り、人間のより豊かさを求める活動の結果なのです。石油の消費量は日本を抜いて中国が世界2位になったそうです。自分達は使っていて、中国やインドなどの人達が種々の電化製品や自家用車を使うなどとは言えないわけです。CO₂やダイオキシンを発生させる「ごみ焼却処理」を改め、リサイクルを徹底するとか、土で分解できる植物プラスチックを増やす、生ごみや家畜の糞尿のバイオマスの利用、過剰包装のものを買わないとか、木材をできるだけ利用し尽す：木材→家→家具→紙→トイレットペーパー→バイオガス（メタン）、リサイクルしたいが新品（途上国）との競争に負ける。石油系を自然エネルギーや再生可能なものに変える必要もあると思います。単に個人のライフスタイルの見直しだけでなく、将来を見通した政治や経済のしくみも変える必要があると思います。

国際的な取り組みも始まっており、京都議定書は2月16日より発効しました。それぞれの国だけでなく、自治体、企業、個人が一丸となって努力しなければなりません。最近、私や家族は、できるだけ、レジ袋持参、生ゴミはコンポストへ、こまめに電灯を消す、古新聞・牛乳パックはリサイクルへ、洗い物は洗剤をできるだけ控える、紙は使用済みの裏面を利用など些細なことからライフスタイルを見直し、資源やエネルギーを節約するため、使えぬものはとことん使い、本当に必要なものを必要な分だけ買うように心がけだしました。しかし、このことを他人に勧めるとなると、なかなか難しいところがあります。自分の子にさえ、小さいペットボトルのお茶を止めなさいとはなかなか言い出せません。場合によっては喧嘩になります。知人などに、車もできるだけ排気量の小さいもの（1300cc）を使っていると話しても、見方によれば、五十歩百歩ですし、皮肉に聞こえたり、角が立つことにもなりかねません。その点、自然観察会などで、樹木からなる森林の役割について（水源かん養、CO₂を吸収し貯え地球の温暖化を妨げる、木材として再生可能な資源、森林浴、など）話が及べば、案外、すんなり、一般的な問題として、意識に残り、今までの自己のライフスタイルを見直し、資源やエネルギーを節約する方向を目指す人も出てくるように思います。環境問題はたとえ小さなことでも多くの人々が実際に行動することが大切だと思います。そして、現在よりも悪化していない地球を後の生物たちに残しておくことが現在の人間の責務ではないでしょうか。

変わりもの

札幌市北区 今村 衛

北海道の長い冬が終わり、雪の下から地面が見えてくると、春植物が一斉に葉を広げ花をつけます。

私は、この季節が好きで、4月の第一週から後志の海岸沿いの山に入ります。春が早い年ですと、この頃にはカタクリが花をつけていますしギョウジャニンニクも葉をのぼしています。イチゲも花をつけニリンソウもまもなく花が咲きそうになっています。

こんな花たちを見ていると、大きさや花の色が色々と違っており、それを見て歩くのも又楽しいことの一つです。

そんな花の中で、遺伝的に色素欠損になったり、先祖返りをしたりして、花の色が白くなったものや緑になったものを見つけることがあります。

よく目にするのは、エゾエンゴサクの白花です。色が薄くなったものは比較的好く見ますが、中には完全に色素のないものもあります。纏まって咲くこの水色や青紫の花の中に白い花があるのはよく目につくので、数千本に1本位の割合だと言われてもよく見る感じがしています。

15年ほど前に、以前、炭坑施設のあった場所に行ったとき、この白花のエゾエンゴサクが大きな集団で一カ所に咲いていました。だれかが白花を集めて育てていたのかもしれませんが、数十本以上の白花だけが咲いているのは、見事なものでした。

カタクリの白花は、話には色々聞いており、旭川の突硝山には、白花の群落があるという話も聞いていましたが、未だに見に行っていない。長年、沢山のカタクリを見てきましたが、なかなか白花に会えずにいたところ、数年前に突然目の前に現れてくれました。その日も、カタクリやイチゲなどを見て歩いていたところ、その白花はイチゲのなかに目立たないようにたたずんでおり、遠くからは区別できませんでした。本当にそばに行って「あれっ！」と思っただけで白いカタクリの花でした。その時は、とても嬉しくしばらく飽きずに眺めておりました。本当に清楚というのか清々しいというのか、そんな花でした。

町の中の公園で見つけたのは、ムラサキツメクサの白花でした。通勤で胆振に住んでいたときのことで、通勤で毎日通る道沿いの公園に白い花のツメクサが咲いていました。白いのにずいぶん大きいなと思い、公園の中に入っていったら、そこら中に完全に白いムラサキツメクサが沢山咲いていました。その公園で遊んでいる人たちは、このきれいな花に誰も見向きもしません。一人でここにこしながら毎日行き帰りに見ていたものです。

緑色の花と言えば、ミドリニリンソウが有名かと思えます。

これは比較的多いせいか、私もかなりの数を見えています。ただし、花の形や色には、大きな変化があり、きれいな花の形をしたものもあれば完全に先祖返りをしたのか、葉が集まったような花もあります。色も、きれいに白で縁取りされた緑色のものから、ほとんど緑色で、近くで見ても花とは思えないようなものまであります。いろいろなものがあるのが又楽しいところかもしれません。

緑色の花と言えば、まだ花にあまり関心のなかった頃に、ある国道そばの駐車場で休んでいたとき、すぐそばに緑色の花が咲いていました。この花は何か？とは思ったのですが、その時はそれ以上調べもせず、すぐに忘れてしまいました。あとになってからその場所を通り、あれは間違いなくイチゲの仲間であったと気がつきました。その道路を通るたびに探しますが、未だに会えずにいます。この花には、もう一度会いたいと思っています。

変わった花と言えば、色だけではなく花びらの数や咲き方の変わった花を見つけるのも、楽しみの一つです。

カタクリは、花びらの数の変わったのは、結構見ることがあります。しかし、10年ほど前に林道の砂利道に生えていたカタクリは、これまでもそれ以降も見たことのないものでした。一本だけぽつんと砂利道の端の方に咲いていたこの花は、遠くから見てもよく見えました、様子が何か変です。

そばに行ってみてびっくりしました。花卉は8花卉でした。この花卉が交互に4枚ずつ逆方向を向いているのです。4枚は、普通の花弁のように逆向きに返っているのですが、もう4枚の花弁は前に突き出しています。ちょうど花を二つ向かい合わせにしたような花卉の付き方でした。カメラを持っていなかったので、記録は何もありませんが、記憶の中にはしっかり残っています。

こんな花をただただ見て歩いている私も、世の中では変わり者なのかもしれませんが、これからいろいろな花をいろんなところで観察し、たまには変わった花を見つけながら楽しんでいきたいと思っています。

帯広市野草園観察会に参加して

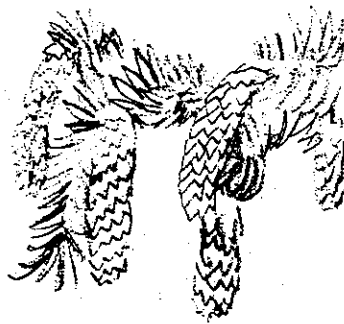
十勝地区 加藤 幸夫

去る2月21日付けの郵便で石狩地区の佐藤清一様から、原稿の依頼を受け、早速ペンを執った次第であります。平成8年に皆様の仲間入りをさせて頂き当機関紙には過去3回程、投稿させて頂いております。

昨年6月20日に当会の事業であります観察会が十勝地区で開催して頂き感謝申し上げます。会場になりました場所は、帯広市内にあります帯広市野草園で実施されましたが、参集者は、十勝地区の会員6人おりますが、半数の3人で、当協議会事務局とで6人でありましたが、少数でありましたが、会員の方達はマンツーマン方式で、綿密に指導を頂き有意義な一日であり、移動観察を企画して頂ければ、地方の在住者は参加できるものと思っております。

これからも、他機関が主催の行事（自然に関するもの）にも積極的に参加して、研鑽に努め高齢化時代に一翼を担うようにして参る積もりです。

当協議会の観察会にも、暫く休んでおり、思いつくままの記述となりました。



エゾマツ

独　り　言

森本 夏彦

今外は、澄んだ空に紫色のきれいな夕焼け。もう、一日が終わってしまう。なんと時の過ぎるのが早いことだろう。私は、自分なりに道内の山はたくさん歩いたつもりでいましたが、まだまだ行ってみたい所がつぎからつぎえと出て来るわけで、これが道外、国外と夢を膨らますと、とても一生の間に歩ききれものではなく、気ばかり焦るものです。

それで山の現状などを少し。平成 16 年は、3 月の多雪と、秋の台風の影響で木々は大きな打撃を受けました。いつも見なれた老木、大木も倒れてしまいました。とくに近郊では支笏湖の周辺が被害がひどく、恵庭岳に登ろうと登山道を行くと、倒木で登山道が隠れるほどでした。このように自然の破壊力の凄まじさを見せつけられました。しかし、木々は何千万年もの間自力でその姿を再生しつづけて来たのだらうと思います。それも、自然が、厳しくも、ゆったりと自力で回復する時間を優しくもって動植物に与えて来たからだろう。もちろん人間にもそれは、分け隔てなく与えたのだらう。がしかしである、人間が、この地球の万物の頂点に立ったと思っただけからは、一見では解らないほどであるが（皆様のほうがお解りと思いますが）じわじわと新手の破壊が進行して来たわけです。それも一部地域に留まるものでなく全地球的にそしてそれは、優しくも回復の時間を与えないものとなって来ております。だいたい文が長くなりそうなのでこころへんで――。

たくさんやらなければならないことはありますし、やる時間は少なくなつて来ております。何をやるべきなのか、私よりこれを読んでいる皆さんの方が詳しいでしょうから文面もなくなりますし省きます。

人間が、ただの生物の中の一つであると考えたら、人間によって自然が破壊され、生物が住めない星になっても、それは自然なのかも知れない。もう転がり行くものは止められないのかも知れない、でも、遅くすることには、間に合うかも知れない。

もう外は真暗闇です。ほんとうに時は早い。

鶴川でコミミズクに出会ったのだ!

札幌市東区 田村 允 郁

寒い時期の野鳥観察には思いがけぬ野鳥に出くわすと感激するものです。それ故にこの時期でしか見られぬ貴重な鳥を是非見たいという思いに心かられるものなのでしょう。

札幌の豊平区に住む会員、荻野さんから、鶴川にユキホオジロやコミミズクが出ているとの情報をうけると是が非でも行ってみたい思いに駆られました。早速、荻野さんをお願いをして、鶴川の会員 門村さんに連絡を取ってもらうこととしました。門村さんには、昨年9月のボラレン行事、鶴川シギ・チドリ観察会で大変お世話になっています。今回も快く案内を引き受けて頂くこととなり、1月26日、関心のある方々に呼び掛け6名で出かけることとなりました。

5年ぶりの大雪(1月末の積雪量)の札幌は朝の渋滞がひどく待ち合わせた皆さんと合流するのに時間がかかりましたが、高速道路に入ると快適なドライブとなりました。ひさしぶりの青空のもと日高道にはいると、前方のはるか彼方に日高の山々がみえてきました。

1時間弱で鶴川のインターチェンジを降り、待ち合わせの鶴川「四季の館」に到着しました。駐車場の周囲の木の枝にアカゲラとシメがいました。早速双眼鏡を出し観察です。

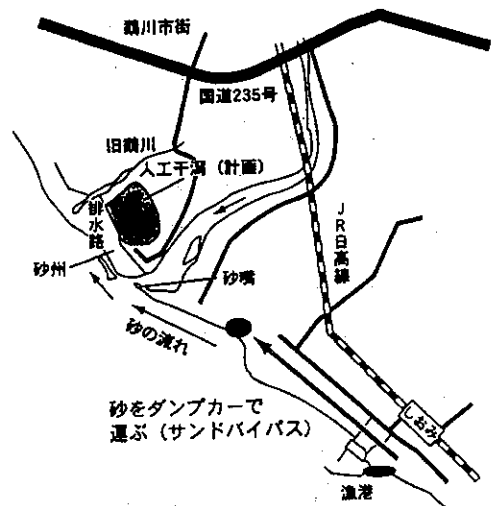
シメの語源は「し」は地鳴のシッで、「め」は小鳥を表す接尾語という説がある。

奈良時代には「ひめ」、平安時代には「ひめ」「しめ」を併用、江戸時代から「しめ」と呼ばれるようになった。

案内をしていただく門村さんのはなしでは、この時期こんな風のない穏やかな日はめずらしいとのこと。期待の高まるなか、2台の車に分乗して観察場所の鶴川左岸にむかって出発です。

国道の鶴川に架かる橋を渡りすぐ右折して堤防の上の道に入ります。「鶴川の街を流れる鶴川、なんのこっちゃ？」などとばかなことを考えハンドルを握っていると、急に先導の車が停まります。慌てて車を止め外に出ると、「ダイサギがいる」、「どこどこ?」。

よく見ると、鶴川に流れ込む側溝に確かにサギの姿。サギと言えばアオサギしか知りません。純白な体と黄色い嘴が雪の上に映え、



見慣れているアオサギより確かに優雅です。門村さんがセットしてくれたフィールドスコープでじっくり姿を観察しました。

白いサギ類のことを特に古来「さぎ」と呼んでいたと考えられる。白鷺類のうちダイサギが平安時代に区別され、江戸時代になってチュウサギとコサギが区別されるようになった。さらにアオサギ、ゴイサギ等は奈良時代から認識されていたようだ。

次に、海岸線近くの砂利採取跡の池のようになっている所に移動します。ここはムレトイの丘といって、アイヌ人たちがシシャモの豊漁を願う場所で、祭壇の跡が残っています。

砂利採取跡の池にはオオハクチョウやハマシギ等がとどまっています。灰色がかったオオハクチョウの幼鳥も混じっています。海の向こうに厚真の火力発電所や苫小牧方面がすっきりと見え波の無いゆったりとした海が広がっていました。

漁港に行ってみようということになり車をユーターンさせます。道すがら前方車が遙かなたの木にとまっているオジロワシを見つけました。鳥見のベテランの眼力に感心しながら双眼鏡で確認しつつ漁港に行きます。人気の無い漁港の岸壁に車をつけ前方を見ると、ウミウがいます。人の気配を感じたのか「わては、上から読んでも下から読んでもウミウだ」と捨て台詞をのこし、バタバタ羽ばたきながら海岸線のテトラポットの陰に消えていきました。海岸線の縁にはカモメやカモの仲間が羽をやすめています。時折、シロカモメの舞う姿が太陽に照らされ純白に輝きます。幾種類かのカモの中から、シノリガモを見つけだしフィールドスコープに入れてもらいます。雄の頭から首にかけてのド派手さに驚きです。大見得をきる歌舞伎役者の風情です。

シノリガモ（晨鴨）、「しのり」とは夜明け、朝焼けの意味というが、この鳥の美しい色彩を表現したもの。英名Harlequin Duckは道化師を連想させるもの。

昼になったので、一旦市街に戻りトイレタイムと休憩を取ることにします。すっきりした体で、再び鶴川左岸の道からムレトイの丘に戻りました。車の中で鳥の出てくるのを待ちますが状況を判断して少し移動することにします。移動途中、車から意外と近くのところ、河畔林の樹木の枝に大きな鳥の姿です。かぎ形の嘴、肩と尾羽の白、オオワシです。「俺は、オオワシだ。何か文句あっか」との風貌に「文句などありませんので動かずにいてください」と車のなかから観察です。

ワシもタカも分類上は「タカ目タカ科」で同じものである。そして、世界的には、タカ目の鳥の中でノスリやオオタカなどほぼカラス大の種までをタカといい、それより大きい種類をワシといている。

JR日高線の鉄橋下をくぐり抜けると、前方の堤防の上に数人のバーダーが双眼鏡でこちらを見ている。気になり車の中から周囲を見渡すと、手の届きそうな枯れた草むらの

中にそこそこの大きさの鳥がとまっています。しかし、車の動きで飛び立ちました。胴体と翼の褐色のまだらに淡い黄色が目立ちます。「コミミズク!」、初めて見る姿を双眼鏡で追います。地表からあまり上がらず、ゆったりと羽ばたきと滑空を繰り返します。

コミミズク、日本に定期的に渡来するものとしては唯一の草原性のフクロウ類。羽角が小さなミミズクという意味。小さなミミズクという意味ではない。

堤防に上がり車を降りて飽きるほどコミミズクをみました。二羽のコミミズクが確認でき、時折、雪上にドサッと舞い降りるユーモラスな姿が笑いを誘います。

今回の目的の一つにユキホオジロがありました。懸命に双眼鏡で探しましたがはっきりと確認できなかったのがちょっと残念でした。ユキホオジロは3月まで出るとの話にまたの楽しみにすることとしました。

午後3時をメドに切り上げることにしました。何年も通っていてもコミミズクに会えない人もいるとの事。ラッキーの一言。ガイドを引き受けて頂いた門村さんに心からお礼申し上げます。充実した心で車を走らせ札幌へ戻ったのでした。

確認した野鳥

ダイサギ ミコアイサ クロガモ ハマシギ マガモ ホシハジロ
シロカモメ シノリガモ ウミウ ハクチョウ オジロワシ オオワシ
コミミズク ハクセキレイ カワラヒワ シメ アカゲラ ハシブトカラス
トビ スズメ

参考文献 ・鳥の名前 (大橋弘一著) 東京書籍

・鶴川河口へチュウシャクシギ君の旅ー ネイチャー研究会inむかわ

・B I R D E R 2005 No.2 文一総合出版

{コマーシャル}

鶴川に来てシシャモを買わずして帰るわけにはいきません。シシャモの時期よくテレビ等で紹介しているのが大野商店です。でも、門村さんのお薦めは佐藤商店ですし、地元の人達にも佐藤商店は人気があるとのこと。早速、門村さんに案内してもらいました。

味見をさせてもらいシシャモを買い込みました。帰って、その晩の酒の肴にしました。

確かに美味、納得しました。鶴川へ行った時や通過した時、佐藤商店に寄ることをおすすめします。住所は次の通りです。

佐藤商店 鶴川町花園2丁目10-3-2 Ⅸ 01454-2-2172

「冬の森の観察会」

記 伊藤秀平

天 候	雪降り (湿った雪が降り、風も少々)
参加者	11名
案内役	ボランティア・レンジャー 8名
出現した野鳥	ミヤマカケス、ヤマゲラ、アカゲラ、ヒガラ、ハシブトガラ、ヒヨドリ コゲラ、シジュウカラ、ウソ、コガラ、エナガ、ハシブトガラス、トビ
動物の痕跡	ベタ雪で足跡は見えなくなっていた。
虫情報	トビ虫。

北海道野幌森林公園事務所が主催し、北海道ボランティアレンジャー協議会が協力して案内する「冬の森の観察会」が2月20日に行われた。

前日の下見は、快晴でまぶしい新雪が気持ち良かったが、当日は湿った雪降り、遊歩道は非常に歩きづらい状態になっていた。「吹雪で大荒れ」の天気予報が出されていたためか、参加者が11名と少ない。

予定していたコースは、桂コース～大沢園地～大沢コースだったが、状況が良くないため、大沢コースのみで出発する。スノーシューで雪を押し付け歩き易いように先導したが、歩くのにかなり時間を要したため、1km地点の分岐でやむなく引き返すことになった。

この時期の観察会は、春に向けての冬芽の状態、動物の食痕・足跡、糞、冬の野鳥、雪の上に見られる虫情報などである。

大沢コースは、低木が少ないため手元での冬芽の観察が詳しく出来なかったが、野鳥は思ったより出現してくれたので、楽しむことが出来た。台風18号による倒木の被害状況や、よほど注意して見ないとわからない、雪の上の小さなトビ虫も見る事が出来た。

自然観察会は、参加者にとっては天候が良いのが望ましいが、悪天候時の自然を観察することも、自然を理解するためには良い体験になったと思われた。

—— 終了後のボラレンの反省会より ——

- ★ テーマを決めてコース設定をする。
- ★ 冬芽が手の届くところにあると良かった。
- ★ 悪天候も自然に対する違った見方が出来る。
- ★ 下見は研修を兼ねているので、出来るだけ参加する。
そしてコースのポイントを話し合う。
- ★ 参加者に名札を付けてもらっているが、親しい交流が出来るメリットがある。

大山の木道に感謝する

札幌東区 小泉都夫

昨秋十月の末、機会があり友と二人で大山に登った。言うまでもなく大山は伯耆富士と呼ばれる中国地方の最高峰であり、西方から見る姿は特に美しい。数年前に伯備線の車窓から、その富士山そっくりに見える大山を仰ぎ、登れる日を願っていた。

今回は米子から真っ直ぐに、大山寺や大神山神社のある登山口に向かい、そこから登った。したがって山の姿は、東西にいくつもの峰をもつ北壁が、近づくにつれ頭上に被さるように圧迫感をもって迫ってきた。午前中は山頂にときどき山霧が流れたが、晴れた日に恵まれた。関西弁の会話を交わす山女や山男と笑顔のあいさつをし合った。

登りは大山寺の裏から行者谷コースをとった。三合目位から丸木の階段となり、急登ではあるが足場はよい。やがて夏山登山道と合流し六合目、小さな避難小屋がある。約1300^円地点が、休憩をとっている登山者が多い。

道は石を数個まとめて、太い針金の綱で縛ったような階段が続く。一段ずつは少し高めだが、よく整備されていて足元はいい。八合目を過ぎると木道となり、登りと下りの分岐点があり、左が登り道である。木道はハイマツの上部と同じ位の高さで、あたかも松の上を歩いているようで眺めも良く、もう山頂も見える。

よく見ると木道は頂上まで続き、山頂小屋と弥山山頂碑をループ状に廻り、下り道になり先程の分岐点につながっている。これは歩き易い。もう着いたも同然、あたりに目を遊ばせながらの登行となる。弥山山頂には2時間30分で着いた。

大山の最高点は剣が峰の1729^円であるが、北壁くずれがすすみ立ち入りは禁止されている。一般登山者は弥山1711^円が最高点である。山頂部分の木道は幅が二、三十^円もあり、数段に段差があり長さも五十^円ほどもあり、大勢の人が山頂にやってきても木道で休んだり、写真を撮ったり出来る。山頂鞍部にある山小屋にもすぐ行けるようになっている。それにしてもよく良く整備された山だと感心し、古くからの信仰の山だからな、などと考えて夏山道を下りた。

麓でバスを待つ間に“大山情報館”と言う丸木の新しい建物が目についたので、のぞいてみた。1Fには(財)自然公園財団の事務所もあり、パンフレットなどもおかれている。壁にはいろいろな情報が張り出してあるが、ふと目についた「自然を保護する一木一石運動」。

情報館の職員から聞いたことも合わせると、大山の自然保護は、なかなか大変な

ご苦勞をされてきていることを、下山しここへ来てから改めて知った。

昭和二十年代、大山山頂は緑の草原だった。世の中が落ちついて登山者が増えた昭和三十年代、草原は踏み跡で谷地化し四十年になるとオオバコが多くなったが、五十年代になるとオオバコも無くなり、谷地に浸食溝が深くなりさんざんたる山頂となった。

鳥取県を初め、多くの有志の団体等がようやく立ちあがった。

昭和六十年四月一日、「自然を保護する一木一石運動」がスタートした。32団体が参加して、登山するにはダイセンキャラボクの苗か石を一個ずつ持って登ることになった。その石で浸食溝を埋めていくのです。キャラボクの苗は植えてみたが山頂では、冬、マイナス十度にもなるので凍上に耐えられなく、一石運動だけが長く続けられ、浸食溝は回復されていった。

その頃、同時に県は木道を作り始め、ついに今日のような素晴らしい道にまでなつたのです。山頂の谷地もすっかり秋の草原に戻っていました。山頂小屋の南面の屋根は、ほぼ全面太陽電池におおわれ、し尿処理も完全とのものでしたが、一人所の匂いは強かったように記憶しています。

「出雲風土記」に神います山、大神山として名を記すといわれる大山、自然を愛し、支えた多くの人達のお蔭で、すばらしい登山を味わうことが出来たのだと知りました。



周氷河地形が出現した八甲田山

成田 伸一

周氷河とは、氷河のあるなしに関係なく、寒冷地で起こる大地の凍結融解にかかわる諸現象全般を、周氷河現象といいます。

水は氷になると体積が増える。その結果として岩石中に含まれる水は、凍ると岩を砕く。また、土中の水が凍ると砂れきは持ち上げられ、氷が融ける時に移動する。この様な凍結融解作用は周氷河作用の中核であり、寒冷地の地形を作る最も重要な作用である。現在も周氷河作用が働いている斜面を現成周氷河斜面、かつて周氷河斜面が作られ現在では植生におおわれて安定したものを化石周氷河斜面といいます。

八甲田山の固有の名称をもつ山はなく、青森市、黒石市、上北郡十和田湖畔、南津軽郡平賀町にまたがる火山群の総称で、南、北八甲田に分かれ狭義の八甲田山は、北八甲田をいいます。最高峰の大岳（酸ヶ湯大岳）、前岳、田茂^ワ岳、高田大岳等八峰があり、何れも楯状火山の上に円錐状、鐘状火山がのったもので、山上には湿地が多い。

南八甲田は櫛ヶ峰を中心に、駒ヶ峰、乗鞍岳があり、尾根状盛り上りで、北八甲田の様な甲状ではない。然し、鞍部は南八甲田の方が雄大且つ広大で高原の景観である。

新第三紀の基盤上に安山岩が噴出したもので、南八甲田では洪積世、北八甲田では沖積世の中頃まで火山活動が盛んであった様で、那須火山帯に属している。

山名は、円錐形釣鐘状で八つ以上のピークが数えられ、縁起の良い末広がりの『八』の文字に肖り八つの甲（カブト）の意味を持ち、先の火山活動により噴出した溶岩層が不透水層を形成した多数の湿原があり、この湿原を神々の田圃にみえ、昔の信仰深い人々には山上にある『神の田』に見えたに相違ない。

『八』という数字には、太陽と、それを廻る天体や方角を指し、全世界や太陽系、ひいては全宇宙を表すことを意味しており、天気予報の「晴」のマークは大きな円を中心に、放射線状に8つの三角形が配置されています。これは東西南北に、北西、北東、南東、南西をくわえた、太陽光が照らす全方位を表わしています。

日本書紀において神武天皇が提唱したとされ、第二次世界大戦で日本のスローガンと掲げられた「八紘一宇」は、日本あるいは全世界を、ひとつの家としてまとめ上げるという意味でもあります。「八」にはこのほかにも宗教、占術、思想にも影響のある数です。

200 萬年前から15 萬年前までの長い時間をかけて噴火によって作り出されたこの山は、我々の様な、常日頃運動不足で軟弱な者にも易しく優しい山であり、急峻な斜面は、赤倉岳等の爆裂火口周辺や、山頂斜面等の山体上部周辺に限られている。

「〇〇谷地」「〇〇池」「〇〇岳」と名付けられた湿原には、残雪地では、ヒナザクラ、イワイチョウ、アオノツガザクラ、等の雪田植物、湿原では、ツルコケモモ、ワタスゲ、キンコウカミズゴケ、噴気活動地にはコメススキ、シラタマノキ、等の硫黄荒原植性がみられる。ただし、硫黄荒原植性地に立入る時には、無風状態に要注意である。酸ヶ湯温泉付近でも場所によっては危険箇所があります。6、7年前に自衛隊の訓練で死亡しました。

酸ヶ湯温泉付近には、東北大学付属高山植物研究所があります。

八甲田山は、易しい山とはいっても高山帯のお花畑を楽しむには、山地帯の上限に近い酸ヶ湯温泉からでも500m以上の高度を地球の引力に逆って登らねばなりません。甲田をいいます。然し、世の中経済の発展するに従いこの山にも異変が起きてきました。

1960年代後半になると、田茂岳にロープウェイが敷設され一気に1300mの亜高山帯へ、そして高山帯へハイキング気分の登山者「観光客？」を大量生産、大量販売時代の思想のもとに大量に運んだ。その結果はといえば、平均化社会の常、ワンパターンでした。

訪れる者にとっては、優しく易しい山であるが故の結果であればいた仕方がないのだろうか...ハイマツの幹や枝は、登山靴やタウンシューズで踏まれ、枯死し始めた。

それでも1970年代初頭の大岳山頂の大部分は、ハイマツにおおわれていたらしい。

その後、枯れたハイマツの幹が白骨累累の様な景観となって、現在では白骨さえない裸地が広がっている状態です。

私も青函トンモルの竜飛工区と北海道側吉岡工区との行き来で、青函航路、八戸苦小牧航路を十数年の間、年間3~5回程度八甲田山系に足を運びました。

その間の変化は大変なものでした。行度に変化していくのがわかりました。

井戸岳、大岳の南斜面は、ハイマツ群落とコケモモ、ガンコウラン、ミネズオウ等高山ヒース(ツツジ科の低木が優占する群落)が、かつては広大に広がっていた。

地質的に、日本の山地は、世界一の強風域あります。本来不安定で移動しやすい火山砕屑物の急斜面は、この場所に存在する植物の根茎のマットで保護され風対策にもなっていました。

このマットがあつと言う間に無数とも言える登山靴に引き裂かれ、無残な裸地が出現しました。1990年代に入り裸地の拡大防止に土砂流出防止垣が延々と作られました。

砂防垣の間には、ミネヤナギの挿木や、現地に生育している草木類の植え込みと種蒔もして
た様ですが、それ等の定着は難行していました。

私は、そんな砂防垣を見に行った訳ではないのに、その延々と続く砂防垣は目から外れる事
はありませんでした。これが深田久弥氏のいう百名山とは到底考えられません。

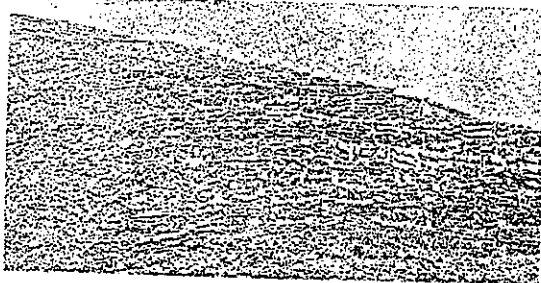
最近の情報では2000年の調査で、種子から発芽した幼固体（実生）が多数生育して来ている
様ですが、高山ヒースの回復には程遠いそうです。

今では、露出した地面の凍結融解作用による構造土も出来始めた大岳山頂部が高山荒原であり、
始めての人は、全くの自然景観だと誤解されて居る様です。

所謂る周氷河地形が人為的に作り出されているのです。

ミヤマキンバイ群落等が幸うじて残る砂れき原は、無数の登山靴が作った、未来へ引き継ぐ
「負の遺産」である事を、この優しく易しい山を訪れた人は一人一人が忘れてはならないと
思う。

深田久弥氏の百名山が、歩幅の異なる階段歩道になり、手摺付の登山道にならない為にも、
月山での自然が10000年も掛けて、やっと70Cmの土が荒廃している現実、北上山地の
木を伐り地域経済発展の為に牧場を作った為に発生した回復不能の風食ノッチ、八甲田山の人
為的周氷河地形との延長線の先には、深田氏の百名山への想いがあったとは心底到底考えられ
ない。



植生回復事業の
土砂流出防止垣



この場所はかつてはハイマツ
の群落地帯

地域の植物を本にまとめる

帯広市 小野寺 実

全道でも地方の俳誌の雄である十勝の俳誌『柏林』発行所から、地域の植物について掲載を依頼されたのは1995年であったろうか。

俳句に親しむ人たちは、自然の草木の大きな関心を持っていて、当時の主宰金子幽氏も「草木を知ることは作句に大いに役立つ」と日ごろより語っていた。

毎月十勝に自生する草木を2種ずつ紹介して5年近くすぎた。

意図したことは・図鑑的な解説に終わらないこと・その植物の文化史的内容を加味すること・別名や異名とそのいわれにも触れること・俳誌の掲載上その草木の俳句を載せる・そしてその草木との出会いの熱い思い出を述べる・・・以上を加味しながら努めて平易な文章で書くよう心掛けた。

毎回色々な資料を漁り、苦勞をしながら5年近くを経て50回を区切りとして、『十勝野の花たち』と題して200ページ余りの本に纏めた。十勝の全図書館、すべての高校に贈呈。2001年に行われた俳誌「柏林」の30周年記念式典の場で出席者全員にも贈呈した。エッセイ風に記述し、十勝の自然の実態と保存と共存の大切さにも触れた文章は、「読みやすい」「あらためて植物への関心が深まった」などの声が嬉しい。

今も俳誌『柏林』に「北の草花」と題して掲載し、近々50回を迎える。

何れの時か再び本に纏めて世に出したいものと考えてはいるが。

私達自然解説員は、日ごろより観察会を軸に自然への理解や啓蒙に努めているが、地域の色いろな活動の機関紙に努めて自然について掲載していく事や、講演などで自然の大切さを述べる機会を多く作ることも、本来の自然理解、保存、共存の啓蒙の場を広げる意味から大切な事ではないだろうか。

今『十勝野の花たち』を読み直しながら、浅学の身として、専門的に見ればあやまりがあるのではないかと恥いりながら、地域の人びとがこの本を通して自然への関心が深まる一助となることを期待している。 以上

鷓川河口及び周辺で観察された野鳥

門村 徳男

春が来ました。鷓川の田畑にはマガンが渡って来ました、オオハクチョウも増えてきました、まだまだこれから増えてくる事でしょう。

これからが良い季節になってきます。もうヒバリも来たと、情報があります。まだ冬の鳥ミヤマガラスも 200 羽位の群れも見られました。

少ないのではカシラダカ、シメ、アトリ、ツメナガホオジロ、猛禽類ではハイロチュウヒを始めノスリ、ケアシノスリ、チョウゲンボウがコミミズクは 6～7 羽が来ていたようですが私の知る限りでも 3 羽位は他の猛禽類に食べられたようです。

多く来た鳥でもユキホオジロは多いときで 100 羽くらい、でも 3 月 3 日を最後にもう見られないようです、ハギマシコは百数十羽で見られたこともあったそうです。海ではクロガモに混じってビロードキンクロ、ホオジロガモ、シノリガモ、海岸ではカモメ類オオセグロカモメ、ミツユビカモメ、シロカモメ、ワシカモメ等が居るようですがカモメはよく分かりません、マガンも河川小沼が凍った時には海にも居ます、波けしブロックについた青海苔もついぼんでいる事もあります。この冬コミミズクが見れましたのは 12 月 19 日でした、元旦頃からコミミねらいのカメラマンが来て居ました、三脚を備え付けたカメラマンの頭上を 2 羽のコミミが飛んでくれた事もありました。

車で来て鷓川四季の館で風呂に入り、数日を鷓川で過ごした人もあるようです、正月にはコミミズク、ユキホオジロを目当てにバスツアーで寄った方も居ました、コミミは堪能したようです。

私達が記録に残している野鳥では平成 15 年 5 月に発行しました「鷓川河口へチュウシャクシギ君の旅」以降確認できた野鳥はクロツラヘラサギ、カラフトアオアシシギ、メジロ、ミソサザイ、コクガンの 5 種がありました、合せると 47 科 210 種になります。クロツラヘラサギは九州へは毎年数羽が来ますが鷓川河口で 6 日間も居てくれました。昨年 3 月からシギチドリの観察ではアカエリヒレアシギ、セイタカシギ、タカブシギ、キリアイ、エリマキシギ、ヘラシギをはじめ 33 種が見れました、オオハシシギ 1 羽は 1 月末まで、ハマシギ 4 羽はこの冬を乗り切ってくれました。

2004 年 3 月から 2005 年 2 月までのシギ、チドリの観察記録を別表にしまして終わりにいたします。

北海道釧路川河口付近シギ・チドリ月別調査表(2004年)平成16年3月から17年2月まで

種名	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	種名	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	
1 レンカク													35 シベリアオオハシジギ													
2 タマシギ													36 ツルシギ			○									○	
3 ミヤコドリ													37 アカアシシギ													
4 ハシロコチドリ													38 コキアシシギ		○											
5 コチドリ	○	○	○	○	○								39 コアオアシシギ													
6 イカルチドリ													40 アオアシシギ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
7 シロチドリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○				41 カラフトアオアシシギ													
8 オオメダイチドリ		○	○	○	○	○	○	○	○				42 クサシギ													
9 オオメダイチドリ													43 タカアシシギ													
10 オオチドリ													44 リリケンキアシシギ													
11 コハシチドリ													45 キアシシギ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
12 ムナヅロ													46 イソシギ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
13 ダイゼン		○	○	○	○	○	○	○	○				47 リリハシシギ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
14 ケリ													48 オグロシギ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
15 タゲリ													49 オオリリハシシギ													
16 キヨウゾシギ		○	○										50 タンヤクシギ													
17 ヒメハシシギ													51 ホウロウシギ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
18 キーロットノネン													52 チュウシヤクシギ			○										
19 トウネン	○	○	○	○	○	○	○	○	○				53 コシヤクシギ													
20 ヒバリシギ													54 ヤマシギ													
21 オジロトウネン													55 タシギ													
22 ヒメウスラシギ													56 ハリオシギ													
23 アメリカウスラシギ													57 チュウシギ													
24 ウスラシギ													58 オオシギ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
25 チビシギ													59 セイタカシギ													
26 ハマシギ		○	○	○	○	○	○	○	○	○			60 リリハシセイタカシギ													
27 サルハマシギ													61 ハイノロヒリアシギ													
28 コオハシシギ													62 アカエリヒリアシギ										○			
29 オハシシギ													63 ツバメチドリ													
30 ミユビシギ		○																								
31 ハラシギ																										
32 エリスキシギ																										
33 キリテイ																										
34 オオハシシギ																										
													月別種類小計数		2	8	17	14	13	12	21	12	9	4	2	1
													年間種類合計数												33	

ネイチャー研究会inむかわ 門村徳男

本の紹介 富良野市 南部 栄一

街の木から川へ山へ——富良野の木と森——

倉橋 昭夫著

富良野では泥亀さんこと高橋延清先生が著名ですが、先生亡き後、その後継者として近郊の野外学習のリーダーとして忙しく活動中に書かれた富良野の森や樹木を総合的に理解する手引書として初心者でも専門家でも広く活用できる本です。ボラレンに1冊寄贈させて頂きましたが多くの会員の方が目を通されることを期待しています。更にここ2～3年手続きさえすれば東大演習林を解放、入山出来るのですが、ここで見る事が出来る自然林の倒木更新は数十年～数百年の森のドラマを僅かな時間で見る事が出来ます。東大当局もボラレンに大変好意的ですし観察会の計画を期待しています。

野幌雑感

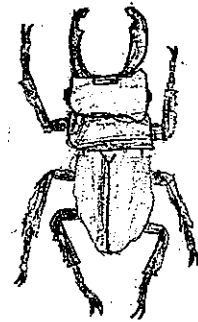
永安 芳江

私が初めて野幌の森を訪ねたのは北海道にやってきてまもなくの頃でした。それからすでに 20 年近い歳月が流れています。初めて訪れたときにはよもやこんなに長い間、自分が野幌と関わることになるとは思ってもみませんでした。

最初に訪れたとき、札幌の中心部からほど近い場所にこんな大きな森が残されていることに驚かされました。鳥や花を見るのが好きだったので、季節によっては早朝から眠い目をこすりながら森を訪れて、鳥や花を楽しんでいました。そのうち忙しさにかまけてこの森から足が遠ざかっていましたが、縁があったので、今度は仕事でこの森に関わることになりました。

そんなこんなで思いもかけず長いつきあいとなった森ですが、毎年、いえ毎回違った姿を見せてくれ、飽きることはありません。うんざりするほど雪の降る冬、逆に雪が少なくてはらはらするような冬、暑い夏や寒い夏、雨が少なかった夏、50 年に 1 度の台風、いろいろな季節を見てきました、もうすぐまたきらめくような春がやってきます。長い冬を耐えて春を待ち望んでいた生き物たちが一斉に活動を始め、一日ごとにダイナミックに姿を変えていく、何回出会っても感動してしまう季節です。これからもこんなすばらしい姿をずっと見ていきたいものです。

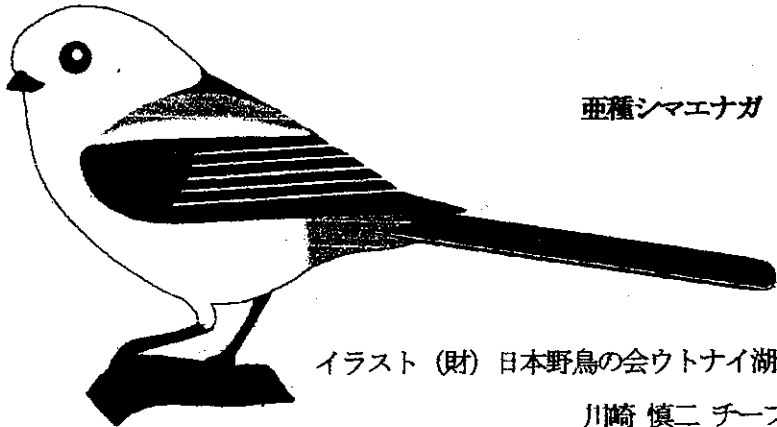
ところで、この森は「野幌原始林」とよく呼ばれていますが、「原始林」はこの森の中にはありません。でも、こんなに原始の面影を色濃く残している森林が、170 万人も住んでいる大都市のすぐそばの、ほとんど傾斜のないこの場所に、この規模で残っていたものです。この場所にこの森を残してくれた先人には感謝しています。そして、この貴重な森を未来の子供たちに残していけたらと思っています。子供たちが楽しく過ごせる森を私たちは残していけるのでしょうか？今、私たちの心が試されているような気がしています。



小西悠(作)

エナガ (*Aegithalos caudatus*)

「純白の顔は雪だるま」「巣の中は羽毛でポカポカ」 荻野 裕子



亜種シマエナガ

イラスト (財) 日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリ

川崎 慎二 チーフレンジャー

4回目の最終回は北海道に生息しているエナガの亜種シマエナガを紹介させていただきます。

川崎レンジャーのイラストを見て頂くとお分かりのように純白で可愛い「亜種シマエナガ」の頭と顔は、まるで「雪だるま」のようです。バードウォッチャーの間で「亜種シマエナガ」ファンが多いのも頷けます。

エナガの全長はスズメより小さい14センチ位ですが、そのうち黒色の尾の長さが7~8センチもあり、尾が柄杓の柄のように見えることからエナガ(柄長)と名づけられたとされています。

嘴は短小で、背は灰黒色で白や赤紫色が混じり、胸、お腹は殆ど白く、尾羽の基部の体下面(下尾筒)は赤紫色をしています。

皆さんもご存知のように、本州のエナガは顔に眼を横切るような黒い線(過眼線)がありますが、実は亜種シマエナガの幼鳥にも本州のエナガのような過眼線があるのです。鳥を見始めた頃、その事を知らない私は幼鳥を見て「北海道にも本州のエナガ渡来か」と一人興奮した失敗談があります。ちなみに亜種とは一つの種

のうち地域によって姿かたちの違いがあるものを分けたものですから、探鳥会などで亜種シマエナガを確認しても出現種はエナガと記録されます。

今年の3月7日、札幌の西岡公園で春を迎え樹液を出しているイタヤカエデを観察していると、2羽のエナガが来てイタヤカエデの幹に滲んでいる樹液を舐め取り始めました。エナガの餌は主に昆虫とその卵ですが樹液も大好きなのです。その日、樹液を舐めに来たエナガは2羽で行動していましたので番だったと思われます。

昨年の3月28日、ウトナイ湖畔で偶然にヤチハンノキに作った営巢中のエナガの巣を見つけることが出来ました。エナガは、まだ雪のある内から営巣を始めます。長楕円形の巣の外側はコケと虫の繭などをほぐした糸で作られ上部に直径3センチ程の入口があります。巣の中は、寒い時期に卵やヒナを凍えさせないよう集めて来た鳥の羽毛を内側から羽の軸を差し込んで敷き詰めます。その羽毛の数は何と1000枚以上にもなるそうです。保温効果のある羽毛を敷き詰めた巣の中はポカポカで暖かそうです。先日の樹液を舐めに来ていたエナガは、まだ積雪の多い西岡公園でしたが何処かに巣を製作中なのかも知れません。

たった一円玉9枚分の重さしか無いエナガの小さな体は、次から次と木々の枝にぶら下がっては餌を探すのに適しています。森の中で、身軽に行動する愛くるしいエナガに出会うと心が和みます。そんなエナガを見つけない時はジュルルッ、ジュルルッと言う鳴き声が頼りになります。この独特の鳴き声はエナガ同士が繋がりを保つ為に発する声で「コンタクトコール」と言うそうです。ぜひ皆さんも森の中でコンタクトコールに耳を傾けエナガを探してみたいはいかがでしょうか。

今回ご紹介したエナガは留鳥でしたが、これからキビタキやオオルリなど南で越冬していた夏鳥達が繁殖のため北海道に渡って来ます。春を迎え、営みが活発になる野鳥の姿や囀りを皆さんに楽しんで頂けると幸いです。

参考文献 フィールドガイド日本の野鳥 (財) 日本野鳥の会 原色日本鳥類図鑑 保育社

日本動物大百科鳥類II 平凡社 「鳥の名前」大橋弘一著 東京書籍

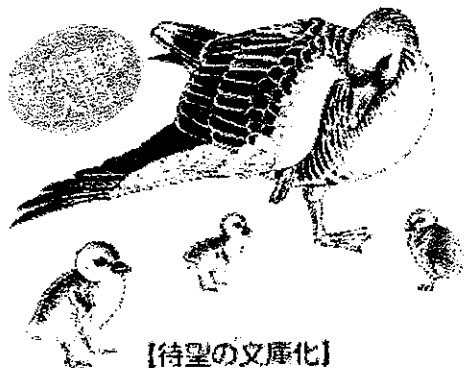
「鳥たちの森」日野輝明著 東海大出版会 「ぼくの鳥の巣コレクション」鈴木まもる 岩崎書店

恣意的ブックレビュー

EOS

「今年の冬は、地域的に楽しってます。」と前号で書いたところ、すさまじいしっぺ返しを食らいました。2月の3連休は雪かきに追われました。冬場の運動不足解消はすでに筋肉痛の域に達しています。さて、今回はちょっと古い本を2冊紹介します。どちらの本も文庫本が出ています。

コンラート・ローレンツ 動物行動学 ソロモンの指環



【待望の文庫化】
動物 この永遠に変わらぬ友たち。
ノーベル賞受賞の動物行動学者がユーモアあふれる筆致で描く動物。「第2版へのお礼状」収録!

ハヤカワノンフィクション文庫

ソロモンの指環—動物行動学入門—

コンラート ローレンツ 著
早川書房 1,325円(単行本)
1987年9月
ISBN 4152030844
735円(文庫本) 1998年3月
ISBN 4150502226

著者コンラート・ローレンツは1973年にノーベル医学・生理学賞を受賞しています。ハイイロガンの孵化を観察していて、うっかり動いてしまい、親と認知されてしまうインプリンティング(刷り込み)の話は笑えます。いろいろな動物の行動について書かれたこの本の題名「ソロモンの指環」とは、あらゆる動物や植物と話が出来る古代イスラエルのソロモン王が持つ魔法の指環です。ローレンツは、あたかもこの指環を持っているかのごとく動物の行動を解き明かします。

ずいぶんと昔に読んだ本なので、今回レビューのために探したところ、人にあげてしまったのか、見当たりませんでした。ここで紹介している表紙は文庫本のもので

エクアドル領ガラパゴス諸島のダフネ島で 20 年以上にわたりひたすらガラパゴスフィンチのくちばしを計測し続けた英国人学者夫婦のお話。ピーター・グラントとローズマリー・グラントの二人は、今現在、実際に進化が起きている事を見る事が出来たと証明しました。干ばつになると草の種子が実らず、大きな種子を割ることが出来るくちばしの大きな固体の割合が増え、逆に湿潤年にはその割合が減るのです。大干ばつやエルニーニョに遭遇するたび、フィンチのくちばしの形状が変化する事実を突き止めました。気候の変動という自然の選択圧により、短い時間で進化が起こるのです。

また、この本は進化の例として、細菌が次々と抗生物質に対する耐性を獲得すること、昆虫や雑草も同じプロセスで殺虫剤や除草剤への耐性を獲得することを示しています。鳥インフルエンザも現在進行形で進化しています。恐ろしい世の中になりました。

フィンチの嘴

ジョナサン ワイナー 著

早川書房 2,243円(単行本)

1995年8月

ISBN 4152079487

945円(文庫本) 2001年11月

ISBN 4150502609



(副会長 五十嵐 一夫)

平成17年 第20回定期総会日程

日 時 平成17年4月16日(土) 13:00~17:00

場 所 環境サポートセンター

札幌市北区北7条西5丁目 千代田ビル1F

日 程 ・受 付 13:00~

・研 修 会 13:30~14:50

元森林総合研究所

農学博士 前 田 満 様

演題 熱帯林の修復と砂漠緑化

・総 会 15:00~16:30

《総会終了後》

・懇 親 会 17:00~ 会費3000円

会場 札幌市北区北7条西1丁目NSSビル地下1F

「大地(だいち)」 Ⅷ737-0223

総会議題

- ・平成16年度事業報告並びに収支決算報告
- ・平成17年度事業計画(案)並びに収支予算(案)
- ・その他

お 願 い

- ・多くの会員の出席をお願いいたします。都合で出席できない旨の報告をされた方でも、当日都合がつく方は是非出席下さい。
- ・当日、17年度の会費を納入される方は受付ます。また後日振替用紙をエソマツと共に同封致しますので忘れず納入方お願いします。
- ・総会についての問い合わせ

事務局 011-791-0127田村 総務部 011-772-0563三崎

富良野 東大演習林観察会

富良野の会員 南部さんのご尽力により上記観察会を実施します。またとない機会ですので実のある研修の場にしたいと考えています。また、演習林から入る大麓山登山も予定しています。多くの会員の参加を期待します。

日にち 平成17年7月1日(金)～2日(土)

場所 富良野麓郷 東大演習林

費用 船・食・輸・送(2300円)+懇親会費で3000円程度の予定

申込み 小林研修部長(釧路市東5丁目3-1 TEL0123-36-3944)

その他 参加者には詳細日程を後日連絡いたします。

・ 会費の納入について

16年度の会費が未納の皆様についてはご協力お願いします。会費は様々な活動にとって欠かせないものです。なお、会費納入についての問い合わせ等については総務部(三崎 011-772-0563)まで。

・ サークル活動

サークル活動が定着してきました。会員からの発信でサークル活動を盛りあげていきましょう。計画があれば事務局がサポートします。また、各地で観察会等の構想があれば発信してください。協力体制を作っていきます。

・ フォレストガイド講座の開講

美唄市にある道立林業試験場の17年度「みどりの指導者」を養成するためのフォレストガイド講座です。要項、申し込み用紙が事務局に届いています。希望の方は事務局(Tel011-791-0127田村)まで。

・ 育成研修会

17年度の育成研修会は日高町にて8月に実施される予定になっています。次回のエゾマツで詳細をお知らせいたしますが、当会の会員を増やしていくためにも、友人・知人にPRをお願いいたします。

平成17年度

観察会・研修会予定(案)

北海道ボランティア・レンジャー協議会

月	観察会・研修会	実施日時	下見	集合場所	備考
4	「春の花を覗けよう」観察会	17.4.28(木)10:15~12:30	4.21 10:00	開拓記念館	協力
5	春のありがとう観察会	17.5.15(日)10:00~14:30	5.14 10:00	交流館(大沢口)	協力・昼食持参
	恵庭公園観察会	17.5.22(日)10:00~12:00	5.21 10:00	恵庭公園駐車場	主催
	三角山登山観察会	17.5.29(日)10:00~14:00	随時	緑花会前登山口	主催
6	森の仕組みを観察しよう	17.6.5(日) 10:10~12:30	6.4 10:00	交流館(大沢口)	協力
	北広島レクの森観察会	17.6.19(日)10:00~12:00	6.18 10:00	レクの森入り口	サークル活動
7	富良野 東大演習林観察会	17.7.1(金)~2(土)		富良野富野	主催
	葉っぱの観察会	17.7.10(日)10:10~12:30	7.9 10:00	交流館(大沢口)	協力
	鶴川海浜植物観察会	17.7.16(土)~17(日)		鶴川四季の館	主催
8	暑い夏の涼しい森を体験しよう 道南地区観察会	17.8.4(木)10:15~12:30 検討中	7.28 10:00	開拓記念館	協力 主催
9	木の実を探してみよう オホーツク支部研修会	17.9.11(日)10:00~14:30	9.10 10:00	交流館(大沢口)	協力・昼食持参 主催
	野外救急法講習会	検討中			主催
10	10kエコハイキング	17.10.2(日)10:00~14:00	10.1 10:00	開拓記念館	主催・昼食持参
	ありがとう観察会	17.10.16(日)10:00~14:30	10.15 10:00	交流館(大沢口)	協力・昼食持参
11	晩秋の森観察会 登満別コース	17.11.3(木) 10:00~14:30	11.2 10:00	交流館(大沢口)	主催・昼食持参
	西岡水源地自然観察会	17.11.23(水)10:00~12:00	11.22 10:00	管理事務所前	主催
12	12月の森の観察会	17.12.4(日)10:15~12:30	12.3 10:00	交流館(大沢口)	主催
1	円山登山観察会	18.1.15(日)10:00~12:30	1.14 10:00	円山登山口	主催
2	藻岩山登山観察会	18.2.5(日) 10:00~14:30	2.4 10:00	緑通会登山口	主催
3	野幌の春を探そう	18.3.26 (日)10:00~12:00	3.25 10:00	交流館(大沢口)	協力

17年度 活動の重点目標

会員の交流と研修活動の充実を図っていく

※野幌森林公園観察会下見後の研修会(年間4回実施 ふれあい交流館)

6月4日(土) 13:00~ 「葉っぱの下を覗いてみよう。」

7月9日(土) 13:00~ 「葉っぱにまつわるエトセトラ」

9月10日(土) 13:00~ 「種子にまつわるエトセトラ」

3月25日(土) 13:00~ 「木についているもの話」

2005年小樽支部自然観察会予定表
(北海道ボランティアレンジャー協議会・小樽支部)

No.	月/日(曜日)	行き先	見どころ	集合場所・時間
1	4/24(日)	赤岩山～オタオイ海岸	春植物	赤岩2丁目路線バス停 サックス前、9時、
2	5/21(土)	天狗山～穴滝	初夏の植物	天狗山頂リス公園前 9時30分
3	6/3(金)	定山溪天狗岳	野草・野鳥	貸切バス小樽駅向い、 第3ビル前バス停7時
4	6/30(木)	アポイ岳	山の草花	貸切バス、 小樽駅隣り三角市場国道寄り 出入り口、4時、
5	8/20(土)	手稲山山麓	夏の樹林帯	星置川乙女橋あたり 8時30分
6	9/11(日)	丸山～遠藤山～天狗山	野草、キノコ	JR塩谷駅前駐車場 8時30分
7	10/4(火)	恵庭岳	紅葉	貸切バス小樽駅向、 第3ビル前バス停7時
8	11/6(日)	小樽市有林内	カラマツ黄葉	路線バス商大線終点 8時30分
9	2/20(日)	天狗山東斜面	カンジキ歩き	天神浄水場前広場 8時30分
10	3/27(日)	赤岩山	カンジキ歩き	赤岩2丁目路線バス停 サックス前、8時30分

参考

- ①約1週間前、道新小樽版、読売金曜夕刊等に集合場所、時間等を再掲します
- ②天候外の都合で、日時等変更する事も有りますので事前に申し込み願います
- ③参加料は、1人300円、貸切バスは実費、当日受付で願います、
- ④自家用車の方はその旨連絡願います(駐車場の状況、乗り合わせの可否等)
- ⑤申し込み、問い合わせ等は、0134-27-1701、北原迄、

編集後記

- * 表紙の親しみを感じさせるフクロウの絵はいつものように会員の熊野さんに描いてもらいました。野幌森林公園で出会ったフクロウだそうです。この公園などでもギリシア人が<知恵の女神>といった鳥たちを見ることは少なくなりました。フクロウは森の暗闇のなかで目を大きく開いて深く沈潜している様子はとても魅力的で守護神のようにも見えます。私たちの活動もこの女神たちによって静かに観察されているのかもしれない。
- * 今回は全道の仲間から多くの原稿を送っていただきました。植物などの成長を繊細な感覚で細かく、いわば<虫の目>で観察され、又公園、山、海岸などを大きな視点で、いわば<鳥の目>で観視されている様子が書かれています。自然への優しさが伝わってきます。
- * 前号でもお知らせしたように富良野の南部、十勝の小野寺、鶴川の門村さんから執筆された本を寄贈していただきました。そこでその動機、内容などを紹介していただくために原稿をお願いしました。
- * 私たちの活動の場ともなっている野幌森林公園、そこで活躍されてい永安さんに執筆を依頼しました。忙しいなか子どもさんの絵をも挿入されすてきな原稿をいただきました。とても感謝しています。
- * 私たちの機関誌も多くの仲間にご書いていただき豊かな内容になってきたように思います。今後ともサークル活動の現在を示し、未来の方向をも指し示していきたいものです。そうした意味で原稿を待っています。(S)

2005年3月23日 発行

会長 川端 功治